

八尾坂修著『学校開発力と人(ひと)：人の存在・連携を重視した公教育の構築に向けて』

畑中, 大路
山口東京理科大学工学部：助教

<https://doi.org/10.15017/1563381>

出版情報：教育経営学研究紀要. 18, pp.121-122, 2016-01-23. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)教育経営学研究室/教育法制論研究室

バージョン：

権利関係：

八尾坂 修 著

『学校開発力と人（ひと） 人の存在・連携を重視した公教育の構築に向けて』
（ジアース教育新社、2015年、全169頁）

畑中 大路（山口東京理科大学／助教）

本書は、学校改善へ向けた方策としての「学校開発力」の向上を、「人」（教員、保護者、地域住民、行政職員等）の視点から捉え、先行研究と多様なデータをもとに論述したものである。

著者の八尾坂氏は、これまでに『アメリカ合衆国教員免許制度の研究』（風間書房、1998年）や、『明日をひらく30人学級』（かもがわ出版、1999年）、『現代の教育改革と学校の自己評価』（ぎょうせい、2001年）、『学校改善マネジメントと教師の力量形成』（第一法規、2004年）、『教職大学院—スクールリーダーをめざす—』（協同出版、2006年）、『学校改革の課題とリーダーの挑戦』（2008年、ぎょうせい）等、国内外の教育行政・教育制度・教育経営を対象に数多くの著作・論文を執筆しており、本書はそれら研究成果を踏まえ書かれた集大成の1冊といえる。

本書は全体で4章構成となっている。第1章「学校開発力とリーダーシップ」では、本書タイトルに付されたキーワード「学校開発力」を、「組織マネジメント力」、「教師指導力」、「保護者・地域連携力」、「学校文化力」の4つ視座から構成されるものとして位置付け、各視座の要点を論述している。第2章「学校の組織力とリーダーの育成」では、学校経営における「学校開発力」を支える校長や主幹教諭等のスクールリーダーに着目し、その役割と育成の方法について、国内外の事例・データをもとに論述している。第3章「新たな時代に求められる学校開発マネジメント」では、近年の学校をめぐる現状を論ずるべく、学校評価や教員評価、教員の服務、メンタルヘルス、体罰、保護者との信頼構築、いじめ防止対応策といった具体的なテーマを取り上げている。第4章「現代の

教育改革に求められる学校開発力」では、本書冒頭で述べた「学校開発力」の構築必要性に改めて立ち返り、教科書や学習指導要領、カリキュラムマネジメント、学校適正配置、少子化問題、小中連携教育など、最新の教育時事を取り上げ、今後取り組むべき方策を提案している。

本書の特筆すべき点は2点ある。1点目は、上記章構成・内容からも読み取れるように、非常に幅広い領域が対象とされるとともに、その論述も多様な視角からなされている点である。例えば、スクールリーダー育成に関して述べられた第2章は、国レベルの施策（第9節「主幹教諭の位置はどうあるべきか」）や、各都道府県レベルでの具体的な取り組み（第11節「キャリアステージ研修体系とは」）といった教育行政・教育制度の内容紹介にとどまらず、日本教育経営学会が作成した「校長の専門職基準」の位置づけと可能性（第10節「プロフェッショナルスクールリーダーの養成」）や、アメリカにおける教師教育の現状にも触れ（第12節「アメリカの教員免許・養成・研修制度から学ぶ」）、それらから得た示唆をもとに、著者が九州大学教育学部で10年来取り組む「学校管理職マネジメント短期研修プログラム」の実践事例について言及するなど（58頁）、「研究知と実践知の往還」が意識された内容となっている。この多様な視角からなされた言及は、著者の幅広い研究関心と、現在も福岡市教育委員長として教育研究と教育実践の懸け橋を模索する努力の賜物であるといえよう。それゆえ読者にとっては、本書を通読することで、現代日本の教育研究、教育実践に関する最新の知識理解が進むと予想される。

本書が持つ特徴の2点目は、上記網羅的な内容

を「人」の視点から捉えなおすという意欲的な取り組みにある。本書の記述は、公教育の実際を、校長をはじめとする教員の視点だけでなく、保護者・地域住民や行政職員といった視点も含み捉え直し、そこから浮かび上がる課題や解決方を提案する形で展開されている。従来から、当該研究領域は「人不在」の言及が先行するきらいがあり、その点へ批判がなされる傾向があった。確かに、目に見えづらい現場の「空気感」を含み分析する当該領域は、その分析視座として用いる制度面への言及が多くなりがちであるが、それは学問の性質上致し方ない側面であろう。しかし、本書のタイトルや執筆内容からは、その学問的な課題へ応答しようとする明確な姿勢が読み取れる。

以上のように、先行研究の到達点や課題を真摯に受け止めつつ、さらに高みを目指す著者の研究姿勢は、駆け出しの研究者である評者にとって頭が下がる思いである。しかし、今後私たち若手研究者が引き取るべき研究課題を浮上させる意味も込め、評者が感じた本書の課題を2点記載したい。

1点目は、用語の定義の必要性である。例えば、本書の主題にある「学校開発」(School Development)とは何を指すのか。教育経営研究には「学校改善」(School Improvement)というキーワードも存在するが、両者の違いはどこにあるのだろうか。また、上記「学校開発」、「学校改善」といった研究上の用語に限らず、本書が取り上げる「指導が不適切な教員」(第17節「指導が不適切な教員とメンタルヘルス課題への支援」)等、学校現場においても、その内実の判断が困難な用語も存在する。先述のとおり、本書の研究領域は現場の「空気感」を対象とするゆえ、その「空気感」を描写する用語は抽象的なものになりがちである。しかし本書が掲げる「学校開発力」の向上、あるいは「学校改善」の展開を目指すためには、学校教育に携わる人々の共通理解がなによりも重要であるため、改めて一つひとつの用語が示す意味・意義に立ち返り、吟味しなおす必要があると評者は考える。

2点目は、「人」の視点の考究である。前述のとおり、本書は公教育を「人」の視点から捉えなおすという非常に意欲的な著作であるが、その深まりは未だ十分とはいえない。例えば、評者が研究対象とする「学校組織におけるミドルリーダー」を例にとると、本書におけるミドルリーダーへの言及は、「自らロールモデルであることを常に意識しつつ、若手や後輩教員の些細な相談にも積極的・受容的に応じ、支援を心がける「コーチング」の姿勢」(5頁)や、「組織運営体制の中で教職員のボトムアップを図り、かつメンバーシップの高揚を図る」(11頁)、「教職員一人ひとりの学校運営参画意識の高揚、満足感、組織力向上」(51頁)といった「あるべき姿」の提示にとどまり、上記を達成するうえで必要とされる人と人との相互作用や、そこで生じる葛藤などへの言及は十分になされていない。これは本書が論述対象とする「地域・保護者との信頼構築」や「スクールリーダー育成」、「カリキュラムマネジメント」等においても共通する課題である。本書副題に掲げられた「人の存在・連携を重視した公教育の構築」を目指すためには、上記観点からの論述がなされることも望ましいのではないだろうか。

しかし繰り返しとなるが、「人」の視点から公教育を捉えなおし、多様な視角から論展開がなされる本書が持つ意義は大きい。また、本書はその読者として、「学校関係者、教育委員会のみならず教育課題に関心のある地域関係者、広く学校教育(制度、行政、経営、教育内容、教育方法、教育社会学、比較教育等)を学ぶ学生」(iii頁)を想定した入門書としての性格を持つことを踏まえるならば、評者が指摘した上記2つの課題については“敢えて”詳述せず、読者の課題意識を高めることに目的を置いたという推察も可能であろう。その意味で、本書は学校教育に関する知識共有のプラットフォームとしての位置づけが可能であると同時に、教育学を志す学部生や大学院生、そして我々若手研究者が今後の研究課題を立ち上げるための最適な1冊になるといえる。